



1 ポポロ広場(鉄道のなかった時代、フラミニア街道からこのポポロ広場のポポロ門をくぐってローマに入るのが決まりだった。)



2 ジェズ教会(天正遣欧少年が2か月余り滞在したバロック様式の教会)
3 スティッベルト博物館(満智羅(マンチラ)の前で)



5 教皇謁見
(永田団長により教皇へ「福」と書いた色紙を手渡した)

ローマ教皇謁見
派遣された中学生4人は、当時の少年たちと同じ袴・袴姿でヴァチカン市内にある謁見会場に入りました。派遣団には特別席が準備されており、最前列でローマ教皇と謁見を果たしました。

ローマ・フィレンツェ
天正遣欧少年使節が訪れた場所を中心に、ローマ市およびフィレンツェ市を視察しました。そこには500年以上も前の建物がたくさん残っていて、当時の少年たちと約430年の時を超えて繋がったような感覚を覚えました。また、フィレンツェにあるスティッベルト博物館では、島原・天草一揆(1637年)のときに、幕府軍が着用した可能性が高いとされる満智羅(鎧の下に着用する防具)を見学しました。

天正遣欧少年使節ゆかりの地へ



4 教皇謁見
(謁見のためにサンピエトロ広場では約5万人が押し寄せた)

特集② ~400年前、少年使節団が踏んだイタリアの地へ~ 平成遣欧少年使節イタリア派遣事業



サンピエトロ広場(サンピエトロ大聖堂の屋上から撮影)



サンピエトロ大聖堂を背景に

セミナーヨ授業再現事業に参加した中学生の中から4人を選抜し、平成29年10月19日から29日までの11日間、平成遣欧少年使節団としてイタリアへ派遣しました。
この事業は、1582年にキリシタン大名の名代としてローマを目指し、ヨーロッパへ渡った天正遣欧少年使節の偉大な功績を顕彰すると共に、歴史をとおりて郷土に誇りをもつ人づくりや、グローバルな人材育成を目的に中学生を派遣しているもので、今回で6回目の実施となりました。

※派遣された中学生の感想文から一部を抜粋して紹介します。



高木 優斗さん(口之津中学校 3年)

天正遣欧少年使節が長い年月をかけて訪れた場所に実際に行きました。日本の国内しか知らなかった4人の少年と私たちが同じローマの美しい建物を見て、同じようなことを考えたのだらうと思うと、彼らと私たちは

約430年もの時を超えてつながっているのだと思いました。また、約430年前長い航海を乗り越えてローマ教皇に謁見するという功績を残した天正遣欧少年使節を育んだ南島原をより誇りに思うようになりました。キエーティ市でのホームステイで2つのことを学びました。

1つ目は家族の大切さです。ホストファミリーは、最初に会ったときから別れるときまで私のことを家族の一員として接して、困ったことがあればサポートしてくれました。だからホームステイの間は楽しい時間を過ごせたのだと思います。そして、家族というものにはこんなにもあたたかさがあるのだと気付

きました。これから、同じあたたかさを持った家族をもっと大切にしていきたいです。

2つ目は、言葉は通じなくても伝えようとするのが大事だということです。会話をする手段はほとんど英語しかなくとても苦戦しました。しかし、会話を重ねる上で整った英語を無理に使おうとするのではなく、簡単な単語を並べた文で話したり、身振り手振りを使うことがより伝えやすくなるということに気づきました。これからは、英語の読み書きだけを勉強するのではなく、話す、聞くといったコミュニケーションをとるうえで必要な技術をもっと身につけたいです。



木村 日香梨さん(北有馬中学校 2年)

私はこの海外派遣事業を終えて、たくさんの事を知ることができました。

日本とは違う暮らし、言葉、文化などで不安もたくさんありましたが、外に出て歩いてみると、一つ一つが驚きと発見

の連続で充実した11日間を過ごすことができました。

驚いたことはたくさんありましたが、その中でも訪問した学校での間食・授業風景にびっくりしました。まず間食についてですが、きちんと朝食・昼食を食べているのに、ピザトーストのような間食が3回もあったのです。

そして授業風景ですが、日本ではいすに座って受けるのが当たり前ですが、イタリアでは机の上や友達のひざの上に座って授業を受けていたのです。国が違えば授業風景もまったく違うものなのかと驚きました。

中学校を訪問した日が偶然にも私の誕生日で、ケーキやプレゼントを準備してサプライズの誕生日パーティーを開いてくれました。一生に一度の素敵な誕生日を過ごすことができました。キエーティの生徒はみんな明るくて優しい生徒ばかりでした。キエーティでたくさんの方々と出会えて本当に良かったです。

この派遣事業を通して、イタリアのことが好きになりました。そしてもっと日本が、南島原のことが好きになりました。このすばらしいふるさとをのこしていけるよう、これからも頑張りたいと思います。